

## 徳山藩絵師朝倉南陵と朝倉家墓所墓仕舞

会員 栗崎 健

### 朝倉南陵・震陵墓碑移設

朝倉南陵・震陵親子の墓碑は、朝倉家一族二五基の墓碑と共に、令和四年（二〇二二）十一月一〇日まで周南市営泉原共同墓地にあった。

朝倉家本家は第九代故朝倉喜作氏が最後の当主である。喜作氏の長女真理子氏は小松敏雄氏に嫁ぎ、朝倉家本家は途絶えることとなった。長年墓守をされていた真理子氏は、令和四年、断腸の思いで墓仕舞いを決断された。特に徳山藩の著名な絵師で多くの足跡を残している南陵・震陵の大きな自然石の墓碑を破壊することに心を痛めておられたが、幸いにも福田寺森江住職が墓碑の引

き取りを快く引き受けてくださり、福田寺境内に徳山藩士墓碑と共に保存されることになった。文化遺産がふたつ守られた。

南陵の自然石墓碑の正面には「宗林軒南陵墓 八十五歳自書」裏には「天保十四癸卯十一月廿日卒 行年八十八朝倉光世」と彫られている。

この自然石の出どころが判明した。南陵三男震陵が書き遺した『宗林軒様御控物抜書』に「文政十三年三月二十三日福田寺天満宮前小川有之候石十人而取越已後二宗林軒様御名塔相成事」と小さなイラストと共に二尺八寸×五尺と大きさが書かれていた。実際の墓碑は最大値

七三×一一三cmだから下部を切り落として墓碑にしたと思われる。墓碑に「宗林軒南陵墓 八十五歳自書」とあるように、生前からこの川で拾い上げた石を墓碑とし、それに碑文を彫り込むよう決めていたと思われる。

福田寺天満宮とは的崎天満宮（天神）のことで、現在は福田寺近くに、社殿はないものの、石鳥居、石灯籠、石祠が残されている。福田寺社由来によると、「社境内に有之候 御先祖元次公御建立正徳三年也 尤往古何れの年より有之候も不相知候事」とある。また現地の説明板には「昔は境内にタコ食いの松といわれた老木があった、その根を掘り取って、タコ取りの漁火に使用された。春秋の祭りには多くの店が出て、遠近からの参詣者でにぎわった。」（岐山地区コミュニティ推進協議会）とある。徳山は昔からタコの産地なのだ。今は名産「周南たこ」。また、小川とは東川のこと、現在の福田寺の麓を流れる川沿いを歩いてみると大きな岩石が残された、なるほどと思わず驚きの景観に何箇所も出会った。

二百年近く前、福田寺天満宮前小川にあった石は、南

陵墓碑として故郷の福田寺に戻ることとなった。

朝倉南陵は諱を光世、仮名は初め喜代槌、安永八年（一七七九）瑚内、文化七年（一八一〇）正月一五日改め南陵という。実父は阿武六郎左衛門晴俊で、明和四年（一七六七）朝倉等泉友明跡、朝倉家の家督を継いだ。南陵が阿武家を離れた後、弟の阿武章鄰が阿武家の家督を継いだが一歳で亡くなり、その子才次郎が若くして家督を継ぐことになった。阿武家は享保元年（一七二六）の徳山藩改易後、流浪しており、南陵は才次郎に阿武家再興の望みをかけ、力を注ぐことになる。阿武才次郎は諱は士徽、文政五年（一八二二）三月改め敬美、仮名は初め才次郎、文政二年（一八一九）改め丹藏、戒名には西陵とある。この阿武才次郎養育者に朝倉南陵と鳥野甚吉の名前がある。南陵は才次郎の伯父である。鳥野甚吉こと勝奥は阿武家の先祖である鳥野家本家四代目である。南陵と甚吉は同年代の親戚であり、南陵はすでに著名な絵師となっており、甚吉も代々表具師として藩に仕

えていたことから、ふたりにより、幼い才次郎に絵師の道を教え込み阿武家を支えたと思われる。

才次郎、後の朝倉丹藏敬美の『初代禄格録』にその頃の蔵本とのやり取りが記されている。それによると、文化八年（一八一二）には「阿武才次郎先々阿武を名乗りたい由、朝倉南陵申し込み候事」あるいは同南陵が「これまで絵図方を仰せ付かり、御用向も多数引受けてきたが、老年となり、難しくなってきた。そこで、鳥野甚吉が養育している阿武才次郎というものが居り、兼ねてより画業に出精している。先々、云々」（要約）その鳥野甚吉も、才次郎が出仕できるよう蔵本に願書を提出している。

才次郎は文化九年（一八一三）三月朔日、三人扶持一代蔵本付として出仕、阿武家再興初代となった。そして、同年九月御雇絵図方役所手伝を仰せ付かり、絵図方南陵につき、絵師として藩の仕事始めた。一族により阿武家再興の為、才次郎を育て上げたのである。

親戚同志になる朝倉家阿武家のご子孫宅にはそれぞれ貴重な史料が数多く遺されている。幸いにもご両家からこれらの史料を見せていただく機会を得、ここに微力ながらもご紹介していきたいと思った次第である。

#### 南陵、毛利就馴公の御居間御用

徳山藩七代藩主毛利就馴公は寛政九年（一七九七）家督を広鎮に譲った。同一年（一七九九）富田に別邸を設け、物髪し風月を友とし悠々自適な隠遁生活を送った。その就馴公の御用を仰せ付かったのが南陵である。その御用の様子を震陵が、天保一四年（一八四三）三月『御居間富田御殿御住居御用諸控』として日記形式に、就馴公が富田御殿に隠居する前の寛政二年（一七九〇）から天保一三年（一八四二）一二月二日「南陵病氣に付」の日付まで記録している。南陵は翌一四年（一八四三）一月二〇日永眠した。

寛政二年（一七九〇）御居間御用で六月、扇地紙形十五枚極真書墨画、御額絹地真彩色山水。七月、押画二

枚彩色、蠟書にして御手拭地十四切、絹地御額ニツ真彩色山水。十月、御枕屏風両面（片面墨画、片面彩色）、書物一冊人物、一冊花鳥真墨画、小翌物二枚松竹梅寿老人彩色、以上御用仰せ付けられる。

富田御殿落成後、寛政一二年（一八〇〇）、小襖二枚、柱隠雲龍金泥一枚、同四枚栗鼠蟹等彩色、花鳥押画六枚、屏風半双物彩色、御額江州望湖亭図彩色、同近江八景真図、大丸形物墨画三顧之図、扇面五本彩色、唐子遊図御枕屏風極彩色など計二二件五三点、「富田御殿御用分御居間御頼ニ付差出」とある。以後も毎年のように多数の作品を精力的に手掛けている。また、就馴公の御供として野村開作、道源開作、遠石八幡祭礼、遠石芝居見物等各地へ随行、また寺院参詣や行歩のお供を仰せ付けられている。

また、朝倉家に伝わる文書はほかにも『献功隊奥羽蝦夷出張中風説』『献功隊諸控』『官邊諸控』『光業勤仕向諸控』『朝倉家年代記極秘書』等多数ある。小松真理子氏は幕仕舞いを機に、これらの史料を一般公開できるよ

う山口県文書館に寄贈された。

### 朝倉南陵絵図・寛文七年巡見使来藩

朝倉南陵が描いたカラーの絵図を、阿武家当主安野英昭氏が所蔵されている。安野英昭氏は南陵の甥阿武敬美を初代に数えて六代目である。二代目阿武晴充が天保八年（一八三七）安野と改姓。代々絵師として活躍、晴充の家督を継いだ晴秋は文久元年（一八六一）仮名を助五郎から保五郎と改名、諱が晴秋である。墓碑には安野男列夫婦とある。号は華嶺かちようという。書物によつては「華嶺」と記述されているものがあるが阿武家の文書に「嶺」が使われたものはない。「嶺」は「ちよう」と読まない。「嶺」が環境依存文字によることで「嶺」が使われたのである。俳人長西六瓢園の実弟であり、代々測量、地図作りに長けた阿武家一族同様、地図製作あるいは画家として活躍、明治初めには、当時まだ一九歳の若き徳山藩士石田仙治方正を手伝い役とし、舞車、河原、泉原、辻等多数の徳山地区大地図を書き遺している。朝倉家の

墓仕舞いには阿武家一族の墓碑も含まれているが、華愼の時を経た墓碑は平成元年に建立されたまだ新しい一族の「安野家」の墓碑の傍にただ一基佇んでいる。戒名はいかにも画家らしく実に粹で「華愼風月居士」とある。

さて、南陵の絵図には「寛文七年未八月十三日海□御巡見之上使エ差上候絵図之控 文化三年丙寅二月 朝倉瑚内写」とある。徳山の山と海が描かれ、地点間の距離が記されている。いわゆる徳山の海図である。

「寛文七年巡見上使へ差出した絵図」。山口市の山口県文書館で調べてみることにした。

『山口県文書館研究紀要三八号』に掲載されている『萩藩絵図方関係年表』 山田稔著に

寛文七年（一六六七）七月「巡見上使稲葉清左衛門殿・市橋三四郎殿・徳永頼母殿御国御通被成候諸事」一袋萩藩絵図方厚母四郎兵衛就種

同年「長府御領絵図」一枚、「府中之絵図」一枚、「清末之絵図」一枚（巡見上使へ長府より提出分の写）萩藩絵

図方厚母四郎兵衛就種

という記録があった。「寛文七年巡見上使に差し出した絵図」は確かに存在した。しかし現在、残念ながら各藩の絵図すべて行方知れずという。また、巡見上使稲葉清左衛門・市橋三四郎・徳永頼母の名前は『御国目付寛文巡見使来藩一件録』の寛文七年（一六六七）徳山来藩の記録に見ることができた。

萩本藩には早くから絵図方という役職があった。厚母四郎兵衛就房が承応元年（一六五二）御両国絵図方を仰せ付かっている。就房は寛文六年（一六六六）八月二三日死去、同年一〇月一六日養子三左衛門就種が家督相続し四郎兵衛を名乗り萩藩絵図方となっている。因みに徳山藩はというと、

南陵が徳山藩絵図を制作するにあたって、萩本藩を訪れたのが文化三年（一八〇六）二月である。その背景には伊能忠敬の全国地図作成にある。伊能忠敬が領内の測量に入ったのが同三年三月であることから、徳山藩領の



南陵絵図「寛文7年御巡見之上使 $\epsilon$ 差上候絵図」を文化3年南陵写

地図作成を依頼された南陵は、その準備の為、本藩を訪れたのであろう。史料には絵図方という肩書がない。測量方あるいは絵図認方である。徳山毛利家文書に『絵図方之事全録』がある。その一頁目に、「文化九年（一八二〇）九月五日、南陵の甥阿武才次郎、朝倉南陵絵図方手伝役を仰せ付けられる。」と記載されている。ここに初めて「絵図方」をみる。徳山藩に絵図方役ができたのはおそらく南陵のこの時代であろう。その後、「文化十一年（一八二四）一月二十八日御蔵本絵図方役所創設」「南陵、絵図方役所に出勤を仰せ付けられる。」という記録が多数の書にある。南陵の功績大である。

因みに、南陵の時代を遡ること約百年、朝倉家初代等収繁経と長男甚七友信が、享保六年（一七二一）に描いた「御領地並海上嶋々大絵図一二枚」が山口県文書館に保存されている。

### 朝倉南陵の主な賞美

寛政三年（一七九一）一二月、巡見上使御用に付、大絵

図十一枚認方仰せ付けられ他の労により銀三枚拝領。

寛政四年（一七九二）二月二八日、上使萩へ御下りに付、徳山村絵図認方仰せ付けられ銀三枚拝領。

寛政六年（一七九四）二月二八日、御用画多数仰せ付けられ出精に付、金三百疋拝領。

寛政十年（一七九八）二月二五日、御用画多数仰せ付けられ出精に付、金三百疋拝領。

寛政十二年（一八〇〇）二月二八日、御用画多数仰せ付けられ出精に付、金二百疋拝領。

文化三年（一八〇六）二月一五日、公儀測量方御役人御巡廻之節出精に付、御紋付御上下、金二百疋拝領。

文化八年（一八一）二月二〇日、近年、島、諸村山林等の絵図制作など多数の御用出精に付、銀三枚拝領。

文化九年（一八一）九月五日、絵図の御用を幾多も引受け出精、苦勞の事に付、銀二枚拝領。

## 終りに

南陵、震陵を筆頭に、徳山藩の絵師として多大な功績

を遺した朝倉、阿武家の人々。彼らの人生を書き遺した文書が多数、世に出てきた今、小松真理子、安野英昭両氏に感謝するとともに、益々の研究を必要としている。

また、南陵、震陵の墓碑は奇跡的に遺されることになり、徳山の文化財として長く保存を可能にして下さった福田寺森江信孝住職に感謝するものである。

## 〔参考文献〕

- 『宗林軒様御控物抜書』朝倉震陵編
- 『御居間富田御殿御住居御用諸控』朝倉震陵編
- 『朝倉家略系図』朝倉家所蔵伝来巻物
- 『朝倉家・安野家過去帳』朝倉・安野家所蔵
- 『初代敬美日記全』安野英昭所蔵
- 『初代禄格録』安野英昭所蔵
- 『萩藩絵図方関係年表』山田稔編 山口県文書館研究紀要第三八号
- 『萩藩閥閥録 第二卷』山口県文書館編
- 『絵図方之事全録調査』毛利家文書
- 『譜録 萩藩厚母家・徳山藩朝倉家・阿武家』毛利家文書
- 『御国目付寛文巡見使来藩一件録』毛利家文書

\*毛利家文書は山口県文書館所蔵



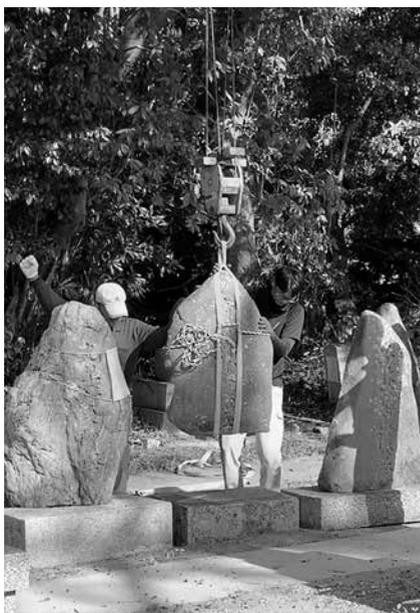




墓碑撤去前の朝倉家墓所 泉原共同墓地



興元寺副住職による魂抜きのお供養



墓石のあった  
福田寺麓東川



親子でトラックに！

